

# 麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 食品生命科学科

職階 講師

氏名 山本純平

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

## 1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

私は食品生命科学科に所属し、栄養や食品に関連する講義および実習を主に担当している。それらに加えて、研究室生への教育研究指導・支援を行っている。また、インターンシップ担当として学生のキャリア支援を行っている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
栄養学	食品生命科学科	必修	1	56
栄養学実習	食品生命科学科	必修	2	46
食品学	食品生命科学科	必修	2	47
食品生化学	食品生命科学科	必修	2	47
食品開発PBL実習	食品生命科学科	選択	2	40
インターンシップ	食品生命科学科	選択	3	18
食品加工学・保蔵科学実習	食品生命科学科	必修	4	40
卒業論文	食品生命科学科	選択	3, 4	14
食品健康科学特論	環境保健学研究科	必修	M1	2
食品健康科学特別演習Ⅰ	環境保健学研究科	必修	M1	2
食品健康科学特別実験Ⅰ	環境保健学研究科	必修	M1	2
食品健康科学特別演習Ⅱ	環境保健学研究科	必修	M2	2
食品健康科学特別実験Ⅱ	環境保健学研究科	必修	M2	2

## 2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

私の教育理念は、「食を科学的・論理的に捉え、それを基に自ら適切に発信できる（コミュニケーションを取ることができる）人材を育成する」である。食に関連する情報は科学的根拠の乏しいものあるいは非常に恣意的なものなどが数多く存在している。将来の食の担い手となるには、それらの情報を適切に取捨選択・考察し、正しいものを社会に発信できる能力が必要である。そのため、私の担当科目や研究室活動を通じて基礎的な知識や科学的・論理的な思考が身につくよう、特に心がけている。

また、情報を自ら適切に発信するためには専門知識もさることながらコミュニケーション能力が重要である。学生と積極的にコミュニケーションを取ることによって学生の間関係の輪を広げ、社会人としての円滑なコミュニケーションが身につくよう、自身の行動で示すことを心がけている。

### 3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

上記の理念を実現するため、「基礎知識の定着」「科学的・論理的な思考の育成」「適切な発信方法の習熟」「コミュニケーション能力の向上」これらに重きを置いて教育を行っている。

「基礎知識の定着」については、講義科目では毎回復習のための小テストの実施とその解説を行い、振り返りの時間を設けている。実習科目では必ず予習をさせ、予習の元に実際の操作を行うことで、手技への理解や習熟度を高めている。これらを都度行うことは学生の学習時間確保にも繋がり、重要な知識の定着が可能となる。また、講義科目では成績評価法の詳細を初回に提示し、学習意欲の向上を図っている。

「科学的・論理的な思考の育成」については、授業内で学生の興味を惹きそうな話題を提供することによってそのきっかけを作り、解説を付け加えることによって気づきを与え、主観的ではなく科学的・論理的に物事を考える端緒を開くことに注力している。その後、関連する課題、例えば食糧自給率を調べる・食品表示情報を集める、などを課すことで自身の経験による裏打ちがなされ、科学的・論理的な思考力の効果的な醸成を図っている。また、講義科目の試験では文章題を多用し、自己の思考を文章でアウトプットする能力を養成している。研究指導ではその発展として、適切なデータの捉え方や論文の読み方などを指導し、自身が出したデータを客観的に見ることのできるよう指導している。

「適切な発信方法の習熟」については、下に示すようなアクティブラーニングを実施し、正しいデータの調べ方やそれをわかりやすく発信することに取り組ませている。研究指導ではグラフの作成から引用の付け方まで、研究成果を適切に発信するための指導を個々に対して丁寧に実施している。

「コミュニケーション能力の向上」については、講義・実習や研究室活動のほか、学内で学生と出くわした際にも、挨拶など簡単なコミュニケーションを積極的に取ることを心がけている。適切なコミュニケーションのできる大人の模範としてその姿を見せ、また教員が積極的にコミュニケーションを取ることで学生間のコミュニケーションも円滑となり、良好な人間関係によってさらに能力が磨かれるということを目指している。

#### (1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

講義科目では調査学習を取り入れ、与えたテーマに対しての調査とレポート形式でのアウトプットを実施している。また、食品開発PBL実習では問題解決型学習であるPBLを実施しており、問題に対して自ら考えアイデアを出し、議論しあい、試行錯誤し、その情報をアウトプットするという一連の流れを授業内で実施している。

## (2) ICTの教育活用

有

実習科目においては適宜実験手技を動画化して配信している。これにより、効果的で理解しやすい事前学習が可能である。また、講義科目については全ての講義を録画して授業後に配信しており、復習しやすい環境を整えている。

# 4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

## (1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

講義・実習共に学生へ提示する資料はわかりやすさを重視して丁寧に作成しており、授業時間中の時間配分などにも意識している。また授業内容や重要なポイントが効果的に学生へ伝わるよう、抑揚を付けて話すことを意識している。実習では、実験操作の予習用動画を作成し、教育の質を上げる工夫をしている。

## (2) 学生の理解度の把握

A

講義では毎回小テストを行い、その回答状況の確認を行うほか、栄養学の講義では章末テストを3回実施し、単元ごとの理解度の把握に努めている。実習科目では手技のチェックを行うほか、実験結果をその授業内で提出させている。

## (3) 学生の自学自習を促す工夫

A

テスト範囲や出題形式を明確化し、毎回小テストを行うことで予習・復習を意識づけさせている。栄養学の講義では章末テストを授業内に3回行い、単元ごとに復習するきっかけを設け、知識の定着を図っている。また、定期試験勉強の一環として想定問題を学生に紹介し、試験対策のきっかけを作っている。

#### (4) 学生とのコミュニケーション

A

授業後に質問する時間を設けるほか、学生からとどいた質問のメールはオフィスアワー以外でも速やかに対応している。レポートについては、採点時に改善点などを全員にフィードバックしている。そのほか、研究室へ直接訪問がある場合も柔軟に丁寧に対応している。

#### (5) 双方向授業への工夫

B

アクティブラーニングを実施している授業では十分に実施しているが、科目によっては授業がやや一方通行となってしまっている。

#### (6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

該当なし

## 5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

### (1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

これまでの授業評価はほぼすべての項目で平均を上回っており、学生目線ではおおむね好評と考えている。一部の講義において、出題範囲が広すぎるため試験勉強が間に合わないという意見が散見された。そのため、特に意見が多かった栄養学の講義において、従来の中間テストを章末テストに変更し、単元ごとの試験として授業期間内に計3回実施した。

### (2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

章末テストを採用した結果、「出題範囲が限定されて勉強しやすい」、「復習のきっかけになった」などの意見が多く寄せられ、復習や知識の定着に有効であったと捉えている。一方で、試験が多すぎて大変という意見も多く寄せられており、過度な負荷にならないよう配慮することが今後の課題である。

### (3) (2) を踏まえた次年度の取組

現在の取り組みを継続するほか、その他の講義科目においても章末テストの採用を検討する。授業資料や授業内容については授業評価上は好評であるため今後も継続し、わかりやすい授業の実施に努める。

## 6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

### (1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

動画教材の積極的な活用と単元ごとに試験を行う章末テストを2025年度は一部の科目において実施した。動画教材は、授業に関連するyoutubeの解説動画等を積極的に学生に提示し、場合によっては授業内で視聴させ、授業内容の理解に活用した。章末テストは単元ごとに試験を実施(授業内で計3回)し、復習と知識定着のきっかけとした。

### (2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

youtubeの解説動画等の視聴は「理解しやすかった」「試験勉強にも役立った」という意見が寄せられた。章末テストについては「出題範囲が限定されて勉強しやすい」、「復習のきっかけになった」などの意見が多く寄せられた。定期試験での得点も過年度に比べて高く、内容の復習や知識の定着に有効であったと捉えている。

## 7. 指導力向上のための取組 (FD研修参加等)

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

FD研修にはやむを得ない場合を除いて必ず参加し、指導力向上に努めている。

## 8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

短期目標としては、アクティブラーニングを講義科目でも充実させていくことである。ディスカッションやプレゼンテーションの機会を増やし、適切な情報発信に繋がるような教育を講義科目でも実施していきたい。

長期目標としては、学生全員を高い科学リテラシーを有する人材に育てることである。情報を科学的・批判的に捉え、内容を吟味して適切に発信し、それらを相互に評価するような仕組みを授業科目内で構築・実施していきたい。

## 9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

特になし。